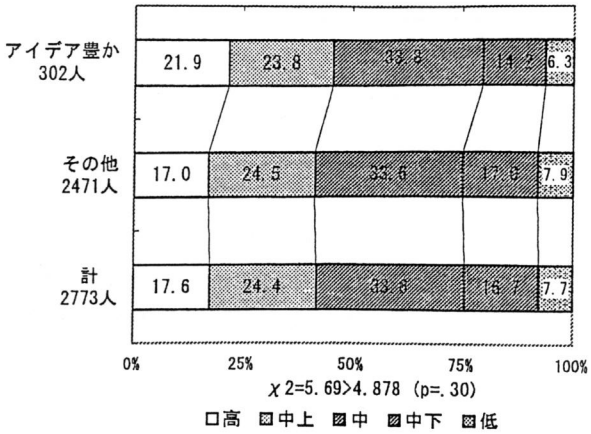

図17-2 アイデア豊かな子における
精神健康度出現率:%

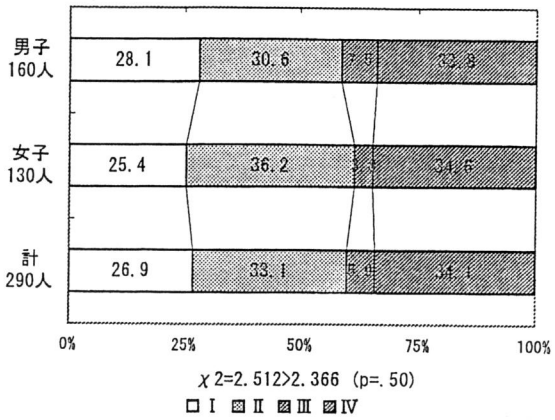

図17-3 アイデア豊かな子におけ
る性別類似人柄群別分布:%

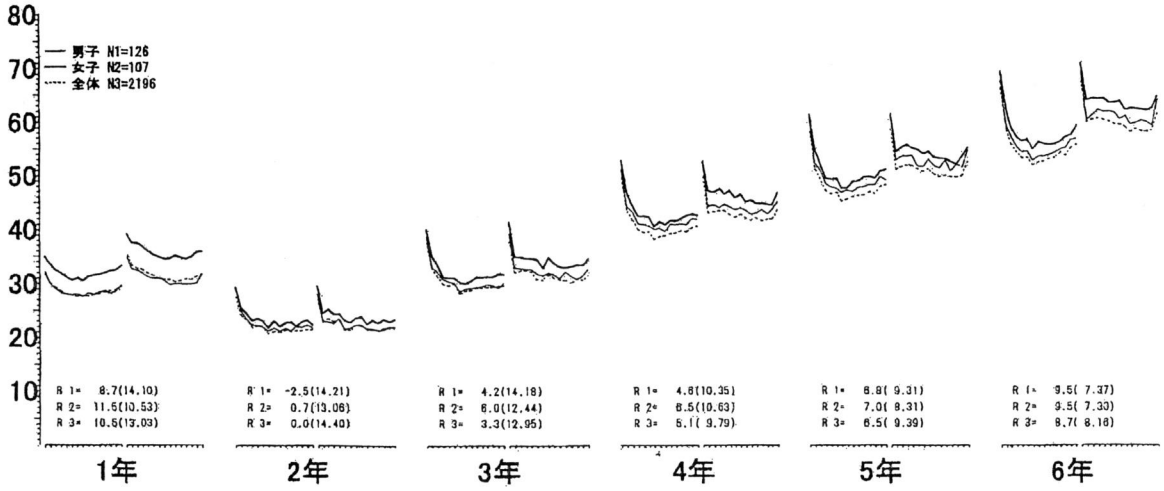

図17-5 アイデア豊かな子の性別平均曲線

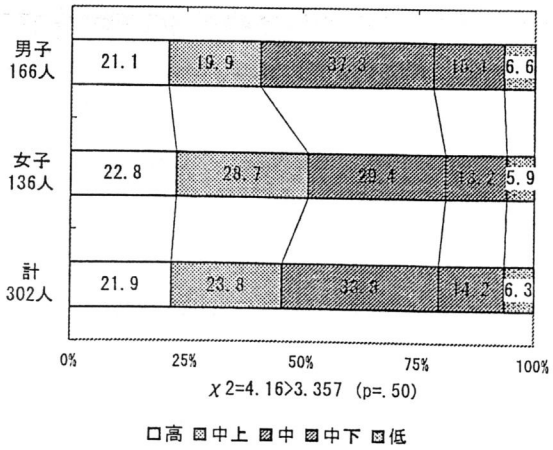

図17-4 アイデア豊かな子における
性別精神健康度出現率:%

iii　行動の遅い子

現代社会は、できる限り無駄を廃して効率的に行動し、ものごとをより速やかに処理していこうとする風潮がある。待たされたり効率があがらないと苛立ち、てきぱきと処理することが社会的に容認され、奨励されたり、価値付けられている。何かをする時に必要な時間の許容範囲を、行動の遅い子は越えているのであろう。能力がなかったり、要領が悪かったり、慣れていなかったりしてどうしていいかわからない。なすべき行動、取るべき態度に迷って行動にあらわせない。考えて結論を下し、方針を決めて行動に移すまでのこころの動きがゆっくりしている。学校生活の中で手のかかる行動の遅い子の特徴はどうであろうか。

i）類似人柄群分布

図 18-1 に示した行動の遅い子の類似人柄群別分布より、Ⅱ群の真面目な子とⅣ群の個性的な子の出現率に差が認められた。行動の遅い子はⅣ群

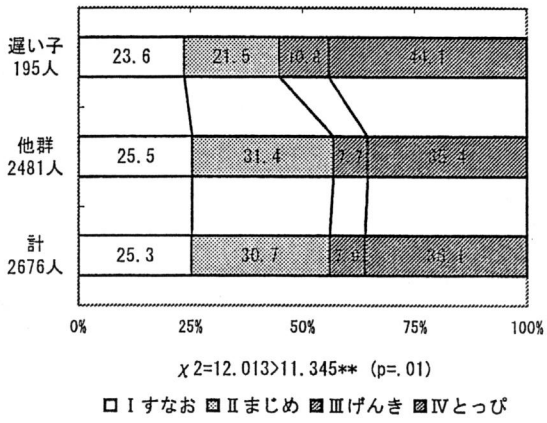

図18-1 行動の遅い子の
類似人柄群別分布：%

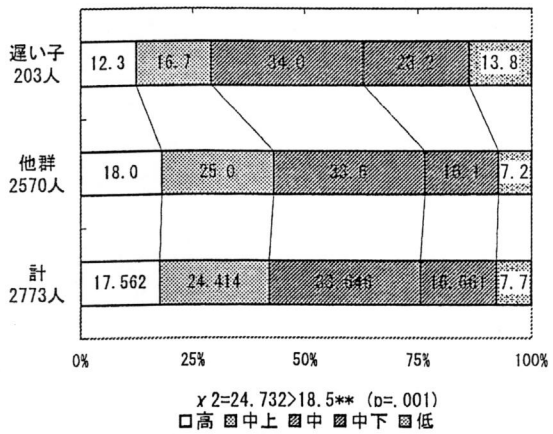

図18-2－行動の遅い子の
精神健康度比較

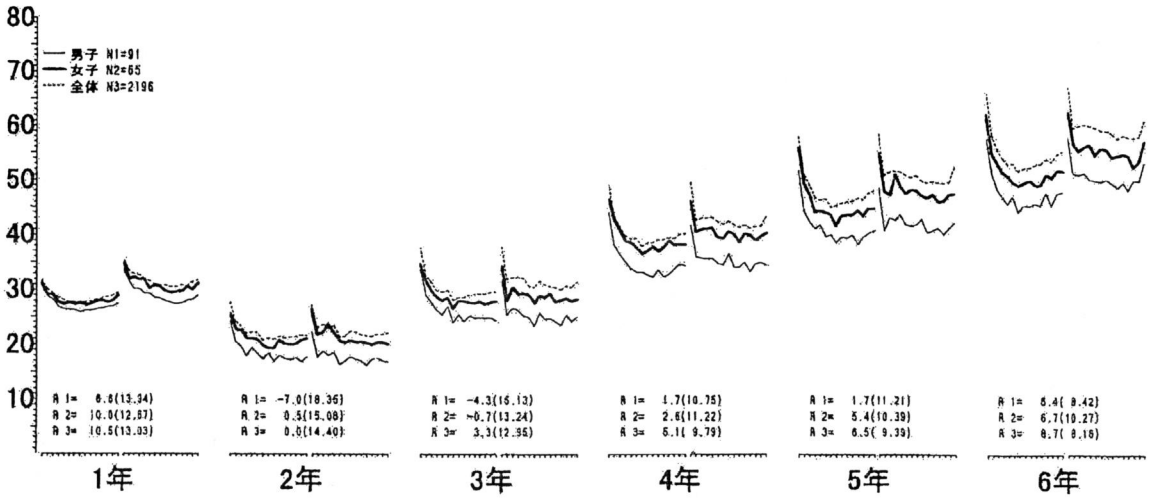

図18－3 行動の遅い子の性別平均曲線

とっぴな子に多く、Ⅱ群まじめな子は少なかった。

Ⅱ群は、真面目で几帳面、堅実で粘り強い。先生からの説明に対して納得ができたら、やるべきことをきちんとするのが得意である。理解できない場合は、時間をかけて得心すればよい。Ⅳ群は、個性的で独創性に富む一方、ちょっと変わった、気むらな子たちである。意思の発動が遅く、気が向かないとやらないところから行動も遅くなるのであろう。

ⅱ）精神健康度分布

図 18-2 の精神健康度分布より、行動の遅い子は、精神健康度の高い者に少なく、低い者に多かった。29.0%を占める精神健康度高＋中上度群は、行動が遅くても当人たちは、悠々としているのであろう。

大人の時間感覚は、時計の時間に慣らされ、時間は等速に進み、その時間秩序に逆らえずにいる。子どもはより自然に近く、無機的な時計の時間には馴染みが少ない。無理やり時計の時間に合わせようとする大人たちの強要を、37%を占める精神健康度低＋中下度群の子たちは、自分でも困ったり、悶々としているのではなかろうか。精神健康度の高い子たちは、自然の体内リズムに合わせて生きているのであろう。

ⅲ）平均曲線

図 18-3 より、一見して破線の全平均曲線に較べ、男女ともに心的エネルギー水準を示す作業量水準が低かった。精神健康度の第一指標である後期増加率も 2 年次女子を除いて低い。行動の遅さは、とりつきの遅さよりも気力不足と意欲減退が主因

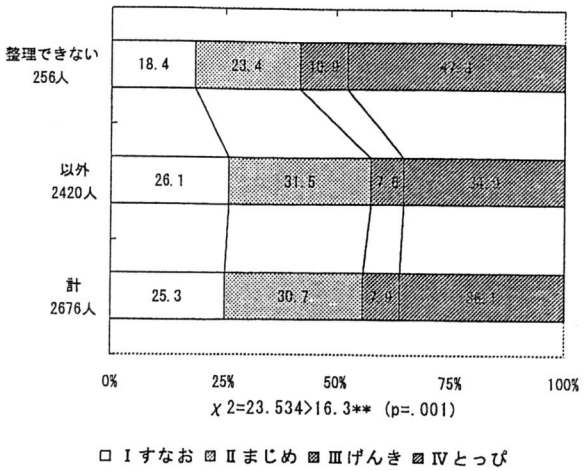

図19-1 整理整頓できない子の
人柄群別分布:%

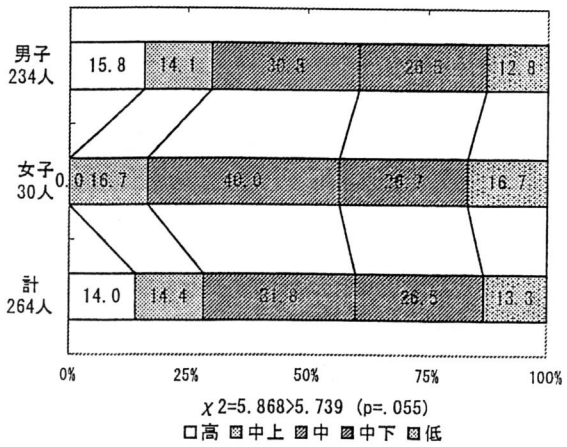

図19-2 整理整頓のできない子の
精神健康度出現率:%

であり、全平均に較べて下降傾向が明らかである。その傾向は、とくに男子に顕著であり、もともと行動の遅い子は男子に多かった。男子の122名に対して女子は81名、6対4の比率になっている。なかでも人柄類型9のはでやか型の男女比は、23名と8名であった。

以上の通り、行動の遅い子は真面目な子が少なく、突飛な子が多かった。精神健康度の高い者は少なく、低い者に多かった。行動の遅さは気力不足と意欲の減退によるものであり、男子にその傾向が顕著であった。

ⅳ　整理整頓のできない子

整理整頓のできない子は、だらしない子との評価がついて廻る。だらしないは、「しだらない」から変化し、しまりがない、節度がなく節目がはっきりしないことであり、自分の身の回りや持ち物を片付けられない。整理整頓や片付けは、遊びや学習活動を再構築する際に工夫や想像を巡らし、生活を豊かにしていくことにつながる。片付けは活動の終了ではなく、次の新たな遊びや学習活動への導入として捉える必要がある。生活が多様化するなかで、子どもらしい生活リズムや節度が見失われがちになっていないか、見直すことも整理整頓を身につけていく上で大切であろう。

ⅰ）類似人柄群分布

図19-1より、適応のよいⅠ群が少なく、個性的突飛なⅣ群が多かった。Ⅰ群は適応がよいので教師の指導に対して素直に従い、友だちと協調しながら整理整頓も実行していくであろう。これに反してⅣ群の一風変わった突飛な子は、教師の指導が入りにくく、自分が関心をもたないと実行に移さない。片付ける必要性を本人が感ずるか否かが鍵である。Ⅱ群の真面目で堅実な子は少なかった。教師の指導を納得して、実行に移す。やるべきことを着実にこなしていく子は整理整頓を苦にしない。

ⅱ）精神健康度分布

図19-2の精神健康度分布をみると、学級担任が整理整頓ができないとしてチェックした子は、男子234名に対して、女子は30名であり、圧倒的に男子が多い。女子は幼少期のしつけのなかで整理整頓をする習慣を身につけ、男子ほど困ることがないのであろう。それだけに女子でこの問題を抱えている子には、精神健康度高度者は皆無である。例数は少ないが中下＋低度13名が4割を越えている。家庭でも整理整頓をするように指導は受けている筈だし、男子のようにおっとり構えてはいれない様子が窺える。

精神健康度3分類による男女比も、ほぼ30%を占める男子の高度群は、男子全体の出現率と変わらない。整理整頓は、男の子にはうるさく言わないで、本人も気にせずのんびり構え、片付けや、だらしなさに対しておおらかな傾向がある。先生の苛立つ姿が見えてきそうだが、整理整頓ができないことから、マイナス評価が固定化して、健康な発達を阻害しない配慮が必要であろう。

ⅲ）平均曲線

図19-3より、男女ともに破線で示した全平均曲

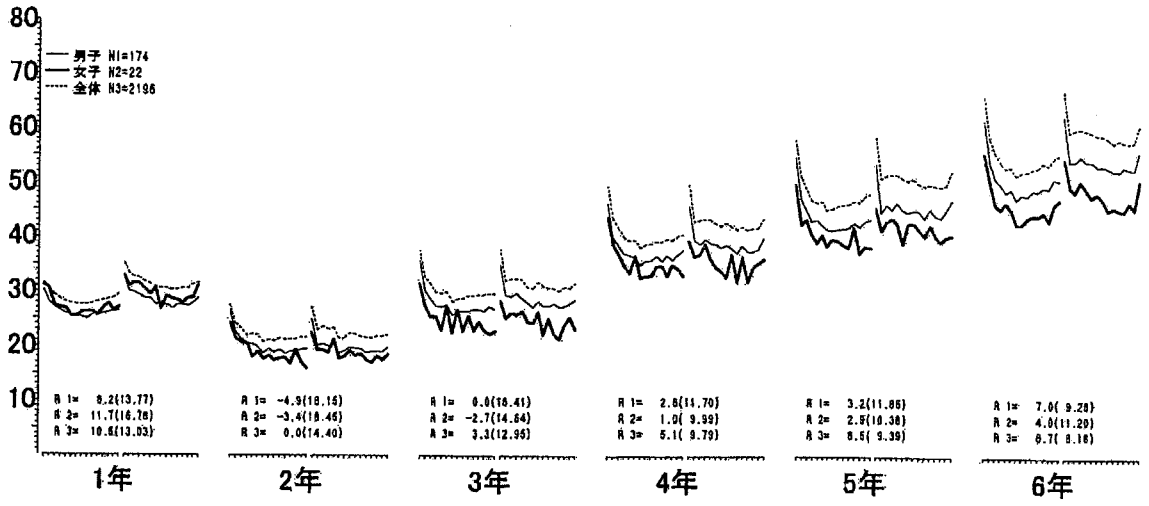

図19－3 整理整頓のできない子の性別学年別平均曲線

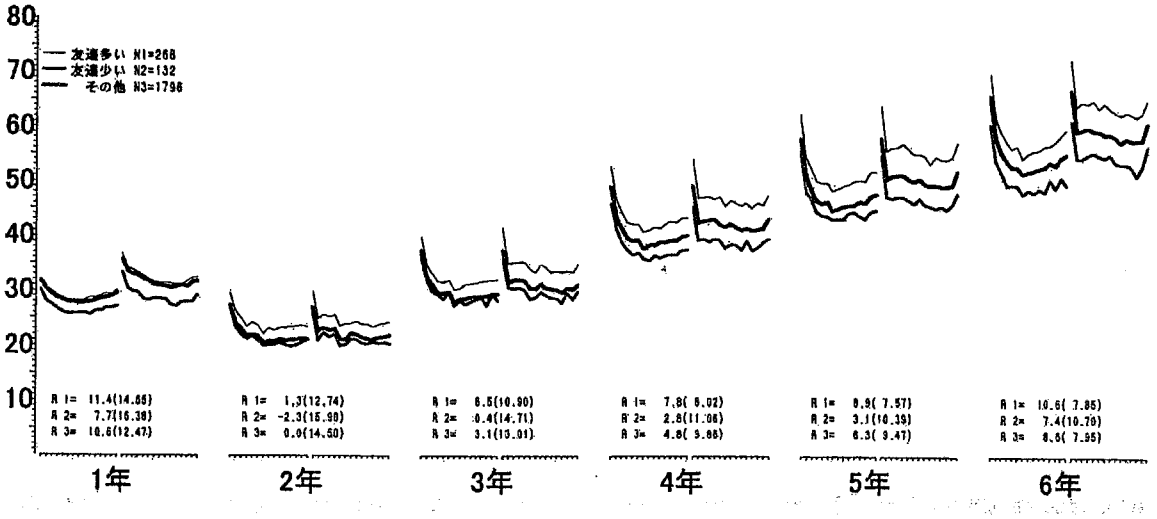

図20－1 友達の多い子とできない子の学年別平均曲線

線よりも作業量水準が低い。女子の１年次後期増加率は男子よりも低く、曲線は大きく下降している。出入り幅が大きいのはサンプル数が 22 名と少ないからである。整理整頓のできない女子は、他の項目のどの平均曲線よりもマイナス徴候を明確に示していた。男子は作業量水準が低い点を除けば、全体の平均曲線と同様の曲線経過をたどる。学年進行とともに柔軟性を意味する前期の弯曲が表れ、女子ほどの不調徴候は見られない。

男子といえども整理整頓ができなければ自分自身が不自由であり、周囲の人たちに迷惑をかける。子ども自身が決定して行動し、自分の努力で環境や自分を望ましい方向へ変化させる。有能感を体験できるような、わずかなやる気を認めていくことが大切である。

v 友達の多い子と友達のできない子

i) 平均曲線

友達数の多少は図 20-1 に示した通り、児童全体を基準に作業量と後期増加率が対極に位置し、友達の多い子は心理的エネルギー水準が高く、精神的健康水準が高かった。曲線傾向は、適応の早さを示す第一行目の突出と柔軟な適応力の現れであ

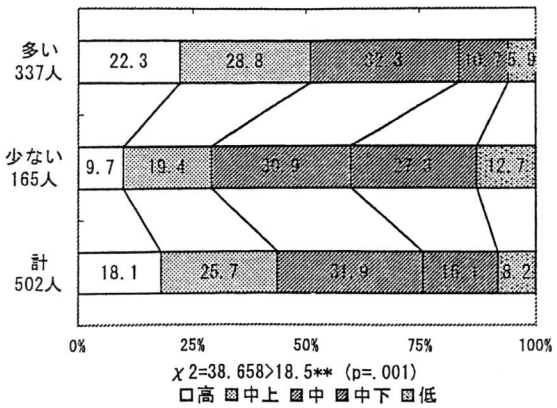

図20-2 友だちの多少と
精神健康度出現率：%

る前期の弯曲が明らかで、意欲や根気強さを示す上昇傾向が他の２群よりも早く低学年から認められた。

一方、友達の少ない児童は全児童よりも作業量と休効水準が低く、１年次から一貫して下降傾向が目立つ。明らかに友だちの多い子とは逆の結果を示した。下降傾向が目につく気力不足の片鱗は⊗法でも認められるが、２年次以降の加算法では一貫して他の２群よりも下降していた。

ii）精神健康度分布

平均曲線上の差異は精神健康度別出現率によっても明らかである。図 20-2 の通り友達の多い児童の過半数が高＋中上度に達し、中下＋低度が少ないのに対して、友達のできない児童の４割は中下＋低度であった。

iii）類似人柄群分布

友達の少ない児童よりも多い児童が多いという結果は安心できるにしても、その比率は約 7：3、友達ができにくい児童がかなり多く存在する。

しかも、友達のできない女子は男子よりも 10% 以上も多い（図 20-3）。この理由は人柄群別出現率に認められる。図 20-４の総計に示したように性別を無視した人柄群別友達の多少に差が見られ、素直な児童に友達が多く、突飛な児童に友達ができにくい傾向が認められる。これを細部について検討すると、男子には人柄群別差は認められなかったが、女子の出現率には差が確認された。個性別差は女子の特徴であり、素直な児童すなわち適応力や協調性のある健康な女児が多くの友達をつくり、気ままで突飛な女児が友達をつくりにくい

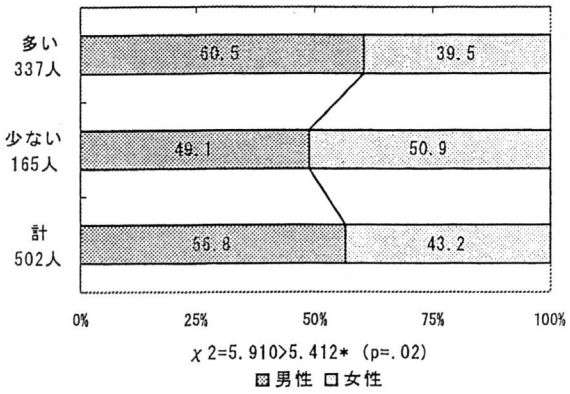

図20-3 友達の多少と
性別出現率：%

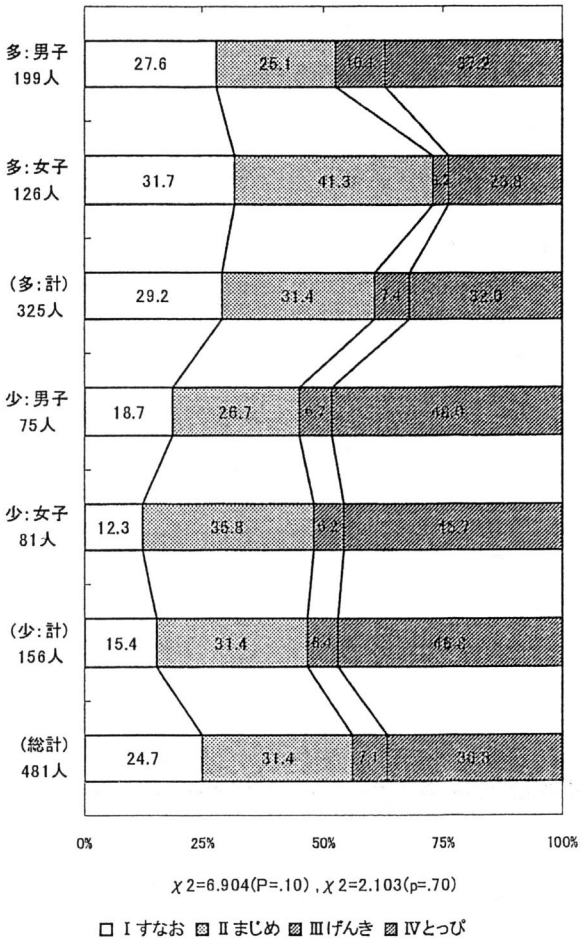

図20-4 友だちの多少と性別
人柄群別分布：%

ことが明らかであった。

以上のＵＫの結果から得られた知見を他の視点から検討してみることにする。アイゼンクの理論に基づいて、反応特性と性格との関係を分析した岡沢（1979）は労研式アメフリテストを用いてテストを行った結果、外向群が内向群よりも有意に多くの作業量を示したが誤ったチェック数も多く示すことを報告している。このような結果はアイゼンクの性格理論から導かれる「ほとんどの作業

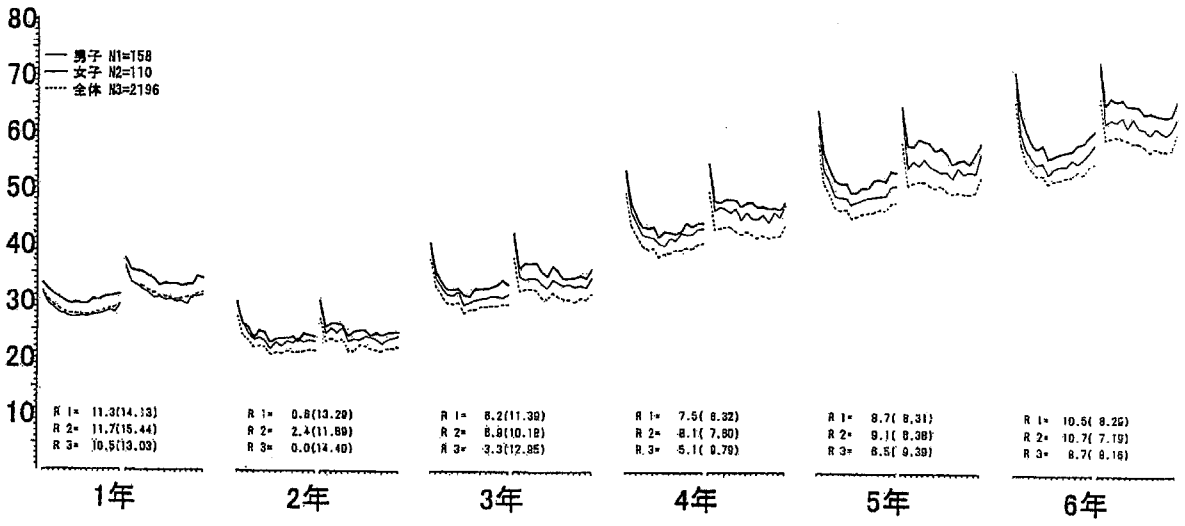

図20-5 友達の多い子の性別学年別平均曲線

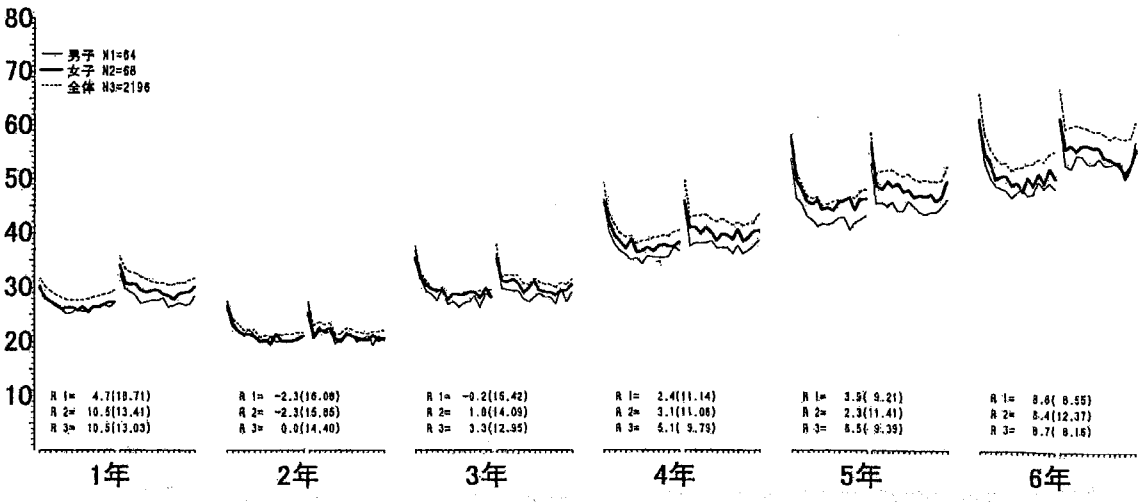

図20－6 友達のできない子の性別学年別平均曲線

では疲労は誤りを生じさせるが、この傾向は反応制止によって生じた不随休止期によるものであり、反応制止の発生は外向者の方が内向者よりも速くて大きいために、外向者は内向者よりも誤りが多くなる。危険行動を過度に統制し、したがって誤りを避けるために速度を落とすように導く皮質興奮は、内向者の方が外向者よりも優勢である。我々の文化の特徴であり、条件づけの過程を通じて獲得されると思われる正確さに対する社会的圧力は条件付けられやすい内向者により内面化されている。」ということを根拠に、内向者は高い正確性と遅い速度に、外向者は低い正確性と速い速度に特徴づけられる作業特徴を持つという仮説に基づいている。

友達ができやすいのは対人刺激を求める外向者であり、友達ができにくい人は対人刺激を避けたがる内向者であると考えられる。それゆえ、UK結果と一致する部分が多くある。また、神経症傾向の高い人に以上のような傾向が高くなることを予測させる研究結果も報告されており、精神健康度との関係もこの作業特性との関係で説明できる可能性がある。